

近代ヨーロッパにおける映画と科学技術の交渉とその受容に関する調査

澤 茂仁 映像学分野・専門 博士後期課程2年

このフィールド調査プロジェクトはオランダ・アムステルダムのEYE Film Institute(以下ではEYEと略記)にて実施された。EYEは、シネマテーク・フランセーズ(仏)やBFI(英)などとともに、ヨーロッパでも有数のフィルム・アーカイブ機関とされている。同機関は大きくふたつに分かれる。上映や展示をおこなう博物館(本館)と、フィルムおよびノン・フィルム・マテリアル(フィルム以外の一次資料全般)の保管とその研究をおこなうアーカイブ棟(別館)、である。今回は主に後者を利用した。具体的には、数人のフィルム・アーキビストに協力を仰ぎつつ、その棟内の「EYE study」なる研究用デスク(要予約)で映画作品の鑑賞と一次資料の調査にあたった。ここでは紙幅の関係で作品鑑賞について述べることにする。

鑑賞の対象としたのは、EYE所蔵の貴重な科学フィルム、とりわけ初期からサイレント期(1900年代前半~1920年代後半)にかけて製作された顕微鏡フィルムとX線フィルムだ。今回の調査では、合わせて約20本の作品を鑑賞することができた。この本数は日本ではおよそ考えられないほど多いといえよう。というのも、フィルム残存率(全体の製作本数に対してフィルムがどれくらい残っているかを示す数値)の低さゆえに、日本国内にはそれらのフィルムがほとんど現存していないからだ。少なくとも同時期に限れば、新たに発見でもされないかぎり鑑賞にあたるのはきわめて難しい。また、鑑賞に加え、50本近くの作品情報(タイトル、年、国、監督、フィルムフォーマット、上映時間、検索キーワード)をリスト化する作業もおこなった。鑑賞したなかからそれぞれ数本ずつ挙げるなら、顕微鏡フィルムには、*Malaria* (1921, NL, 不明, 「マラリア」)、*Wonderen der Naturr: Unit het Rijk der Kristallen* (1927, NL, J. C. Mol, 英題 From the Realm of the Crystals Part I and II)、*Zwerftochten door en Waterdruppel* (1929-32, NL, J. C. Mol, 英題 Wonderings through a Waterdrop)などが、一方のX線フィルムには、*Duitse Nood* (NL, 1920, 不明, 「ドイツの苦悩」)、*Röntgenstralen* (FR, 1923, 不明, 「レントゲン線」)、*Het Wonder der X-stralen* (1924, FR, 不明, 英題 The Miracle of X-rays)などがある。この際、同機関の強みであるデジタルアーカイブを積極的に活用するよう努めた。デジタルならば、検索で容易に作品へアクセスできることはもちろん、自らの判断で自由に停止や巻き戻しの操作ができるため、テキストをショット単位で精緻に記述し分析できるという利点がある。映写技師によるフィルム上映ではこうはいかない。

それらの作品には、観察者(男性科学者)と被験者(女性・子ども)の関係性、時間一運動一プロセスの強調、機械装置の強調、超クロスアップとその他のショットサイズの分析的編集、写真と映画という二つのメディアの併用、高速度撮影の使用、日常性など、興味深い主題や表現が多数見られた。また、映画会社Multifilmと科学者J. C. Molの重要性も判明した。日本の初期からサイレント期(1900年代前半~1920年代後半)における映画言説では、豊洲散土、梅屋庄吉、吉山旭光、権田保之助、寺川信、小路玉一、寺田寅彦といった面々が、フランスの科学者Jean Comandonをはじめとする顕微鏡フィルムおよびX線フィルムに着目しており、その文脈は見世物、芸術、科学、衛生、学術(教育、観察、実験etc.)ときわめて多岐にわたる。今後はそれらを含めて比較映画史的な読解に駒を進めたい。

※作品表記について：作品名(製作年、製作国、監督)